

311

特241

445

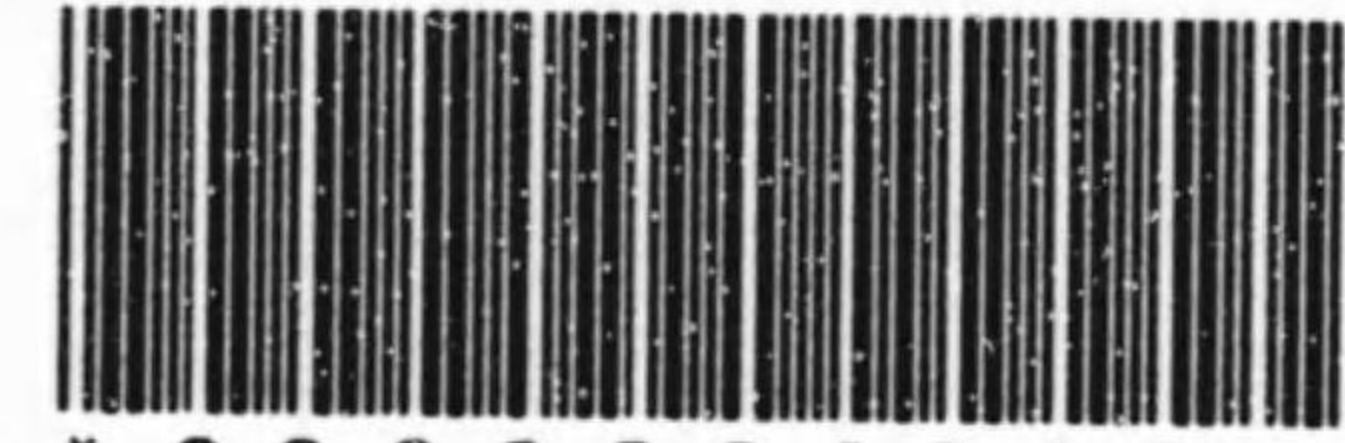
擬装的拳国
一致を排撃す

序言

本編は、今回の總選
舉に際し、同志の應
援の爲めにせる演
說草案なり。

嶋田俊雄識

(非賣品、以印)



0002864000

0002864-000

特241-445

擬装的拳国一致を排撃す

嶋田俊雄・著

安久社

昭和11

ABA

擬装的舉國一致内閣を排撃す



諸君 第六十八議會は何が爲に解散されたか。茲に吾々は立憲事實の意義及真相を検討しなければならぬ。政府の發表したる解散理由書なるものを見ると『政府ハ現下ノ重大ナル時

局ニ處スル途ハ一ニ舉國一致ノ協力ニ依ルノ外ナキヲ信ジ此ノ方針ノ下ニ組閣以來當初聲明セル政情ノ實現ニ向ツテ最善ノ努力ヲ爲シ來ツタ』と述べ、更に曰く『前二議會ニ於ケル審議ノ經過ニ徴シ、又最近ノ政情ニ察スルニ衆



議院ニ於ケル實情ハ到底圓滑ナル國政ノ運用ヲ期シ難キモノアリト認メ」云々、又曰ク『嚴肅公正ナル選舉ヲ行ヒ、明朗ナル政情ノ下ニ所信ヲ實現センコトヲ期シ茲ニ衆議院ノ解散ヲ奏請シタル次第』云々。如何にも政府として言ひさうな申譯である。

併しながらお互國民は決して早まつた判断を下してはならない。蓋し現内閣は口を開けば舉國一致を強調するけれども其實立憲治下に於ける舉國一致とは如何なる事を意味するかを、充分理解して居るか、どうか、是れが先づ第一の問題である。曾て歐洲大戰當時、英國はアスキスや、ロイド・ジョージを首相とする舉國一致内閣を組織した、佛國も同じくクレマンソーを總理とする舉國一致の政府を造つた、爾來所謂舉國一致は恰も世界的流行語の如くなつてゐる。しかし、何處の國にか民意を無視せる舉國一致があり得たか、

又議會の第一黨であり、衆議院に於ける絶對多數黨を除外せる舉國一致内閣が存在し得るとする者があらうか。若しも萬一廣き世界に此の如き奇怪の現象を見ることありとするならば、それこそ立憲帝國の奇蹟である。而して斯くの如き奇蹟的存在——ソレが岡田内閣の正體ではないか。

舉國一致の破壊者は岡田内閣それ自身なり

改めて説明する迄もなく憲法政治に於ける中樞機關は議會である。議會は民意代表の府であり、如何なる政府と雖も議會の協賛を経ずして國政の運行を期することは出来ない。既に議會の設けらるゝ以上、主義政見を同じうする人々が互に相集まりて國家の政策を攻究し討議することは極めて當然の趨勢であつて、苟くも憲政の行はるゝ所、政黨に立脚せざる内閣を想像するが如きは時代錯誤の夢に過

ぎない。それ故に明治の大功臣であり、憲法の起草者たる伊藤公は自ら進んで政黨を組織した。又曾ては官僚の權化の如く視做されたる桂公でさへも、遂には政黨主義に轉身するの已むなきに至つたてはないか。

然るに岡田首相は、口に議會を尊重し政黨に敬意を拂ふものゝ如くいふけれども、事實は全く之に反し、卒直にいへば現内閣は組閣の第一歩に於て正道を履みはづしたのである。形式的には我黨を始め民政黨にも渡りをつけたかに見られてゐるが、實際には先づ二三の官僚と謀りて主要なる閣員を内定し、然る後表面形式一片に政黨の援助を求めたのである。是れ恰も官僚を中心とし或は本體とする内閣の組織を心に描きながら、議會操縦の手段として表面に舉國一致を標榜し實は喰ひ残りの餘りものを政黨に提供せるが如き事態を演出したのである。それは或は岡田首相の本意でなかつたかも知れない。

自ら政界の素人と稱する岡田首相個人としては寧ろ氣の毒なる迷路に立たされたかの感なきにあらざれども、政治は私情に依つて左右されてはならない。殊に我黨は衆議院の過半數を占むる第一黨であり、その背後には我黨を支持する絶對多數の國民が吾々を見守つてゐる。假令舉國一致の名は美なるにもせよ、少數黨の如く尾を振りつゝ易々として官僚の御流れを有り難く頂戴する道理がないではないか。民政黨の人々は齋藤内閣と岡田内閣との本質的差異を混同し、前内閣に閣僚を送れる我黨が何故に現内閣に入閣せざりしかを今尙疑問視しつゝあれども、齋藤内閣はその成立の始めに方り虚心坦懷正道を履んで我黨の協力を要請したのである。之に反して岡田内閣は前述の如くその出發點に於て豫め官僚と策謀せるのみならず我黨の正式機關を経ずして側面的交渉を行ひ我黨の内部を攪亂するが如き事實をすら見せたのである。

こゝに於て我黨は一箇の岡田内閣よりは國家憲政のより重大なることを思ひ、公黨の眞生命と威信とを保持する爲め、嚴然入閣を拒絶するに至つたのである。春秋の筆法を以ていふならば舉國一致の破壊者は官僚に誤られ議會の第一黨を蔑如せる岡田内閣それ自身であり、國政の圓滑なる運用を阻碍せるものも亦同じく國民に立脚する衆議院の多數黨に誠意を缺如せる岡田内閣それ自らの罪に外ならずといふ可きである。

所謂准與黨とは何ぞ

併し今更吾々は徒らに過去を追究するものではない。唯だ現内閣の一枚看板ともいふべき舉國一致主義の實體如何を吟味して國民の認識を明確にすれば足るのである。而して其の結果は上述の通りで、彼等は組閣の第一日に於て既に業に變體的存在となり了して居るにも拘はら

ず、無理をし瘦我慢をして尙それを唯一の御守り札として現在に及んだのであるが、そこに救ふべからざる矛盾がある。試に内閣を構成する閣僚を見よ、軍部兩大臣及外務大臣を別として、其他公々然として政府與黨たる事を云ひ能はざる所謂准與黨の出身と二三の官僚出身の所謂人才閣員以外は何れも我黨を除名されたる人々ではないか。敢て問ふ、いはゆる准與黨とは、そもく何であるか。吾々は露骨なる批評を好まないが口善惡なき無遠慮なる京童等は之を目して所謂第二夫人と同一視してゐるではないか。而して彼の被除名者大臣は何の根據により、何を代表して閣班に列して居るのであらうか。必竟嚴正なる意味に於て一人の與黨をも持たざる内閣が唯だ口頭に於て舉國一致を叫ぶが如きは奇怪にあらずんば滑稽ではないか。歐米諸國に於ける舉國一致内閣を見よ。必ず政黨を基礎とするは勿論、必ずや多數黨を抱擁し互に

融和協力して以て國民總動員の實を現はして居るではないか。然るに獨り岡田内閣は一人の與黨をも有せず而かも、絶對多數黨と隔絶して却つて少數黨の援護の上に立ちつゝある、之をしも舉國一致内閣と云ふべくんば、蝶々トンボも鳥の中といはずばなるまい。

世上には往々政黨の不信を云々するものがあり、政治上に於ける總ての缺點を既成政黨の責任に歸するが如き偏見を盛んに宣傳しつゝある。此風潮の原因を考ふるに、第一は舊式なる官僚主義者の僻説である。第二は五・一五事件以來一部に擡頭せるフアツシヨ的風潮である。而して第三は此の數年來所謂非常時局の反映として言論報道の自由性を麻痺せしめられたる新聞其他の言論機關が不安不平の吐け口を専ら政黨攻撃に求めつゝある事である。併しながらいふ所の政黨は國民の投票によりて選出されたる代表者の集りて

あつて、政黨と國民とは同根、同體、同一物である。人民をして土下座せしめたる専制封建の時代や、其の遺物ともいふべき官僚主義者等としては或は政黨の存在を好まぬでもあらう。又獨逸の如き戰敗國や、伊太利の如く極度の窮境に陥れる國家に於ては、萬機を公論に決するだけの餘裕が無いかも知れぬ、従て一時の非常手段として獨裁政治の風潮の發生も亦止むを得ないかも知れぬが、是れ恰も危篤の病人に對するカンフル注射の如きものである。瀕死の患者には劇薬でなくては効目が無いかも知れぬが、それが危篤に利くからといふて、之を妄りに健康體に試むる事は勿論大禁物でなければならぬ。現に國勢隆々躍進又躍進の途上に在る我國が獨逸や伊太利などの亞流となつて、ナチスにかぶれフアツシヨを謳歌するが如きは斷じて許さるべき事柄ではない。此意味に於て吾々は岡田内閣が官僚に引きづられ政黨不信の聲に誤

られて其のスタートを間違へた事の餘りにも非常識であり、錯覺の甚だしきを憫れまずには居られない譯である。

弱體内閣の
自己告白

勿論、吾々は時局の重大性を認識する事に於いて現政府よりも遙かに深く且つ切實である。従て眞實の意義に於ける舉國一致は吾々の夙に要望し切望する所であるが。それには斷じて擬装的官僚的のものであつてはならない。根本的には民意に立脚する政黨を基礎として國民の總能力を動員し發揚することを前提としての舉國一致主義であらねばならぬことはいふ迄でもない。然るに現内閣は自己の變態性と無力弱體とに反省せず、前二議會の經過並に最近の政情に徴し今更めかしく國政の運行至難なるを啣つてゐるが、斯くの如きは組閣の初めよりわかり切つたことであり、政

黨を輕視せるもの、悲痛なる自己告白に外ならない。吾々は時局の重大性を痛感するが故に既往一年有餘、忍ぶべからざるを忍びて政府の自覺と内外の應急的施設を要求したのであるが、政府の行ふ所は内治に外交に無爲姑息を極め、曾て聲明せる十大政綱とやらも果して何うなつたか。一般國民は今日既にその所在をすら知り能はぬのみならず、政府それ自らに於ても恐らく之を忘却してゐるほど無神經であり無關心の状態である。これでは益々人心の不安を深めるばかりであり、國際關係の改善も、國民經濟の安定も、財政と國防との調整も所詮期待する事は出来ぬではないか。政府は何かといへば内閣審議會に言を藉り一切の政策を擧げて其の調査に待つといつた調子であるが、然らばその審議會の成績はドウであるかといへば創設以來、幾回の會合を重ね如何なる調査審議を行つたのであるか。一ヶ月に一回の會合も見ない

とがあり、其の審議せる所は僅に地方財政調整交附金問題と教育關係問題との二つのみ。之をしも首相の言ふが如く根本國策樹立の綜合的機關であるといひ得らるべきか。今後假りに全力を傾倒して立案に従ふものとしても官僚相手の調査では其の實績を擧げる迄に早くとも三年、五年乃至十年をも要するであらう。此の間時勢は激變する、而かも國民は悠々閑々として之を待つて居られるか何うか。

他力本願主義の准與黨

觀じ來れば現内閣の存在は其の總てが不自然であり、一貫せる方針もなければ定見も信念も無い、それで何うして内外の重大難局を打開し能ふか。吾々は眞實の意義に於る舉國一致——即ち政黨を基礎とする鞏固なる責任内閣に對してならば固より滿腔の援助を與ふるに躊躇す

るものでない。否、時局の重大性に照らし之を要望するが故にこそ曩には民政黨との提携にも應じたのである（兩黨の提携は一時的の内閣や眼前の問題などに拘泥せず、大所高所より憲政の大義に則り難局打開の爲に協力することを其の目的としたのである）。然るに民政黨は政黨聯携宣言の舌根未だ乾かざるに忽ち前言を翻へし公約を反古にして、之が廢棄を通告し來つた。苟くも國家の公黨が正々堂々憲政確立の爲に其の態度を闡明し、兩黨の首領始め四百有餘の議員が白晝互に手を組んで責任政治の實現に協力すべく誓つて置きながら、自黨の都合以外何の理據もなく、遽然として前約に裏切つたといふ事は彼等自ら政黨本來の使命を蹂躪したものであり、彼等が所謂准與黨てふ甘酒に味を占め之れに陶醉せる結果だといはれても答辯の辭はない筈である。或は之れによりて權力、金力の庇護を得、因て以て總選舉に臨まんとす

るのかも知れない。果して然りとせば、其心事の陋劣寧ろ憐むに堪へたりといふべく、立憲公黨の權威と名譽との爲に痛惜措く能はざる所である。

政府に何の資格信念ありや

諸君、吾々は遂に現内閣に對して匙を投げた。政府は我黨提出の不信任案が衆議院の會議に上程せらるゝに先んじて解散を敢行した。其事は固より吾々の豫期せる所であつて政府に挑戦の準備あらば、我黨にも無論敢然應戰の覺悟があり、決して敵に後を見せはしない。假に如何の壓迫、如何の干渉に會ふとも斷じて一步も譲らず、歩武堂々の戦ひを進めるであらう。又現に進めつゝあるのである。併し茲に吾々は改めて全國民の名に於て政府に反問すべき事がある。そもく現内閣は何の資格、何の信念に基きて今回の總選舉を行ひ、何を標榜して敢て國民に懇へんとするのであ

るか。繰り返す迄もなく現政府は政黨内閣では無い、議會に一人の純正なる與黨を持つてはゐない。随つて總選舉の結果、何れの政黨が勝ち、何れの政黨が敗れても、何等現内閣其のものゝ存在と關係は無いのである。政府のスローガンは依然として舉國一致一點張りであるが、組閣の最初から議會の多數黨を無視——少くとも協力を求むるの誠意を示してゐない、唯だ少數黨を踏み臺として官僚的政治を行はんといふ、それ丈では何人が見ても舉國一致どころか、實際には却つて舉國一致の破壊者ではないか。假りに政府の力に依り今後二回三回乃至何十回の總選舉を行つたとしても、天下の一大公黨たる我政友會の協力を得能はざる限り、眞の意味に於ける舉國一致の實現を期することは絶對不可能の事である。

或は政府は此總選舉の機會を利用して民政黨をして衆議院の第一黨たらし

め、それに昭和會と國民同盟とを加へて議會の過半数を制すべく期待してゐるかも知れぬ。併しこれこそ所謂取らぬ狸の皮算用で世に是程笑止の沙汰はあるまい。假りに官權と金力とを濫用して以て内閣の目算通りに行つたとしても、現内閣が時代錯誤の官僚的内閣であり、變態的存在たるの事實に毫も變りはないのである。如何に獨り善がりの政府と雖も政友會を叩き潰すとは言ひ得まい。現に力のあらん限り極度に民政黨を援助しても政友會の實勢力を二百名以下に減殺することは不可能だと政府それ自らが告白しつゝあるてはないか。然るに其の政友會を除外して舉國一致主義の實現を期すといふに至つては寧ろ滑稽の極ではないか。いはゆる舉國一致は文字の示す通り國民全體を舉げての協力結合であらねばならない。故意に或る政黨を排斥して之を舉國一致の目標より除外するが如きは片腹痛き愚論といはねばならぬ。況

んや國民の最大多数を後援とする大政黨に對して挑戦するに於てをや。吾々は賢明なる全國民、全有權者が夢にも斯くの如き滑稽至極の擬裝的舉國一致論に惑はさるゝ事のあり得ざることを確信して疑はないのである。

我國憲政史
上の悲哀

諸君、吾々は此機會に於て、民政黨其他の少數黨が如何なる主義政見を掲げて國民の判斷を求めんとするのであるか、一應の検討を必要と考へる。彼等は現に種々のスローガンを持ち出してゐるが、就中民政黨は擬ふやうなき現内閣の聯帶責任者である。随つて現内閣の擬裝的舉國一致に踊らされつゝあるは已むを得ないとしても、さて其の結果は何うなるか、若しも政黨本來の責務に反省するならば、所謂准與黨といふが如き不名譽なる立場を甘受する事すら立憲帝國々民の汚辱ではないか。其の上更

に總選舉を行ひて官僚の踏み臺となり議會操縦の御傭ひ人足となるが如きは我國憲政の爲め惜しみても惜しき事の限りである。或は現内閣を助けて何等か有意義なる政策を遂行すべしと主張するものもあるらしいけれど、同黨總裁は現に此内閣の閣僚であり、而も總裁自ら同黨大會に臨席して現内閣の施設に對し最善を盡せりと稱してゐるのである。別言せば民政黨の最高首腦が最上最大の能力を以てしても唯今まで一年有半吾人が實驗し目撃し得たる施設以上には何もものを有せず、何もものを期待し能はぬことを自ら物語つてゐるのである。元來が消極主義であり、無謀なる金解禁を行ひて國民經濟を死地に投じて顧みざる民政黨である。吾々の眼には餘りにも無策なる外交、餘りにも跛行的なる財政、餘りにも姑息にして餘りにも國民生活に無關心なる經濟、餘りにも不徹底なる産業施設等々、其の總てが弱體微力と見ゆるに

拘はらず、民政黨では之をしも最善のものとして政府の爲に犬馬の勞を厭はないのか。果して然りとすれば今後民政黨に對して何等効果的政策を望み能はざることには既に明々白々なりといはねばならない。然らば彼等は何の爲めに議會解散を政府に迫つたのであらうか。世人は之を解して曰く彼等は畢竟日當りのよい所で總選舉を行ひ、或種の庇護の下に衆議院の第一黨たらんとを欲するからである。夫れ或は然らん、論より證據、彼等は選舉肅正と總選舉とを別物とし、暗に政府に對して或種の行動を要求してゐるではないか（川崎幹事長の同黨大會）。願れば憲政布かれてより既に五十年、今にして尙ほ官僚の願使に甘んずるのみならず、官憲の力を頼みとし政府の御聲がりに依つて總選舉に臨まんとするが如き政黨の存在を目前に見るに至つては悲哀の極と言はねばならない。

我國の政界に於て、兎にも角にも相當の歴史を有する民政黨にして既に斯くの通りである。昭和會にせよ、國民同盟にせよ、十や、二十の議席しか持たざる微力を以てして、國政の運行上何等有効なる發言權を把持し能はざるは今更語を費す迄もあるまい。唯だ彼等が一縷の願ひは所謂キヤスチング・ヴオートを握ることである。例へば政友會と民政黨との勢力が伯仲して双方の議員數が匹敵した場合、彼等は其の中間に在りて味を占めやうとするものである。それは固より一種の小説であり、ユートピヤに過ぎないが、假りに一國の政黨若くは政治的結社でありながら、進んで積極的經綸を布くだけの氣魄もなく、アワよくは他黨の隙に乘じて漁夫の利を博せんとするが如き少數者の跡を絶たざるは何としても憲政治下に於ける一大恨事といはねばならない。吾々は過去に於て屢々第三黨又は中立などいへるものゝ爲に甚だし

く憲政の發達を阻碍された苦き經驗を有つてゐるのである。若し萬一にも政府の迷誤に依り同様の歴史を再現するやうの事があれば、政界は益々陰鬱を極め我國の憲政は十九世紀の昔に逆轉するであらう。思慮ある國民は無論斯くの如き小兒病的現象を排除して健全強力なる政黨に協力すべきを確信する。

國民は正し
き判断を下
すべし

之を要するに政府及民政黨が今回の總選舉に方り其の一枚看板と爲しつゝある所謂舉國一致なるものは前述の如く擬裝的にして、而かも全然現實の事實に反するものである。尤も岡田首相が大命を拜した當初の理想としては、齋藤内閣の方針を踏襲して各政黨の協力より成る政府を作るに在つたかも知れぬ。併ながら政界の素人たる海軍大將は誤つて其の第一歩を官僚の迷路に踏み込んだ爲め、忽ち彼等の捕虜とな

り。斯くして何等民意に立脚せざる官僚中心の内閣が出現したのである。天下の大政黨であり議會の絶對多數黨たる我黨は絶大なる國民の支持に依り憲政の根本義に即する責任政治の使命を負ひつゝあるが故に官僚中心内閣の御裾分けに盲從するが如き輕卒なる態度は斷然排撃しなければならぬ。是れ我黨が嚴然として岡田内閣と袂を分てる所以であり、舉國一致主義を破壊せるものは岡田内閣それ自身である。爾來政府は頻りに舉國一致主義を以て其の保護色となしつゝあれども、世界列強中、議會の大政黨を見忘れたる舉國一致が何處に在るか、眞の舉國一致は大政黨が小政黨を抱擁する場合に於てのみ正當と認められるのであつて、それが憲政國家の通義とする所である。然るに岡田内閣は之をしも無視して自ら舉國一致を僭稱するが如きは立憲國民を愚にする行動といはねばならない。若し岡田首相にして眞實舉國一致主

義に忠誠ならんと欲せば潔よく總辭職を行ひて更生の途を圖るべきである。然るに現内閣は此の見易き理をすら悟らず、強辯を以て舉國一致を擬裝して之を議會解散の口實に供する如きは唯々驚き果てるの外はない。吾々は現下の國情に鑑みて眞の舉國一致を必要とするものである。眞の舉國一致を必要とするが故に欺瞞的舉國一致を排撃するのである。時代錯誤の官僚的舉國一致を否定するのである、傳ふるが如んば政府關係は民政黨や昭和會の要請に餘義なくされて自ら遊説の途に上るといふ、自發的か他動的かを知らざれども遣るならば大に遣るべしといひたい。そして一般國民が擬裝的舉國一致に與するか、將た眞の舉國一致に味方するかを實地に體驗するがいゝ。此意味に於て今回の政戦は結局官僚主義と政黨主義との戦ひである。變態内閣か、責任政治かを決する憲政史上の十字軍でもある。吾々は多年我黨を支持せる

興隆日本の國民が正を踐んで錯らず。帝國憲政の爲め有終の美を成さん事を切望して止まざるものである。

昭和十一年二月十日 印刷
昭和十一年二月十四日 發行

(非賣品)

著者 嶋田俊雄

東京市芝區田村町四ノ二〇
發行所 福井安久太
印刷人

東京市芝區新橋二ノ四八
發行所 安久 社

